

連載
映画から
見えてくる
世界
第4回

引きさがれた家族を撮る

『ディア・ピョンヤン』について

木下 昌明（映画評論家）



朝鮮民主主義人民共和国（以下北朝鮮）といえば、マスコミは拉致問題がどうの、ミサイル実験がどうの、経済制裁がどうのと敵対的な文句ばかり並べて取りざたしているが、ここで取りあげる梁英姫の『ディア・ピョンヤン』というドキュメンタリー映画は、それとは異なった視点から北朝鮮問題をとらえていて、いろいろと考えさせられる。日本と北朝鮮の関係をもっと足元から見直すこと——政府レベルのレッテル張りの見方でなく、生活に根ざした民衆のレベルからみることの大切さが痛感させられる。

といっても、これは家庭用のビデオカメラで在日朝鮮人である梁家の父を中心にその家族の問題を娘のヨンヒが

撮ったもので、プライベートな家族の日常に即した記録にすぎない。しかし、家族は大阪の生野区（旧猪飼野）に住み、アボジは朝鮮総連の元幹部ということで、画面上は家族の日常であっても、そこで問われているのは、かれらと北朝鮮との歴史的なかわりである。それもヤン家には娘のほか三人の息子がいて、三人とも三十年以上も前に北朝鮮にわたったままなのだ。「拉致」されたからではない。アボジが率先して息子たちを送り出したものである。

戦後の一時期（一九五八年から二十数年）、「在日」の人々は、当時「地上の楽園」と呼ばれていた北朝鮮での社会主義建設に携わりうと「帰国事業」の運動をはじめ、九万人以上が「帰国」した経緯がある。このなかには日本人妻や夫もいた。アボジも

総聯活動の一環として三人の息子たちを七一年に「帰国」させた。以来、彼らは平壤で暮らし、結婚し、子どもを育てて日本には戻っていない(戻ることが許可されない)。

だから、この映画は、一家族のプライベートな問題に焦点をあてているが、そこに光をあてればあてるほど、日本と北朝鮮との歴史的な敵対関係というパブリックな歴史問題が顔をのぞかせる。そこで映画は、一般日本人観客にもわかるようにトップシーンで、「帰国」問題とは何であったかを、字幕によって説明している。そのあとで画面が転換して、食卓をかこんでのアボジとオモニを撮る現在(〇四年)のシーンとなる。わたしは、この映画ではじめて「帰国」問題の何んたるかを理解することができた。これまで日本の劇映画——蒲山桐郎監督の『キューポラのある街』(六二年)から小栗康平の『伽椰子のために』(八四年)をへて最近の井筒和幸『パッチギ!』(〇五年)に至る作品群に描かれた「帰国」風景をみて、いずれも一時代の社会現象とし

てしかみることができなかった。わたしは「在日」の歴史に暗すぎた。「帰国」した人々の九五%が南(韓国)出身だったことさえ知らなかったのである。アボジの故郷も、最南端の済州島なのだ。それなのに一度も住んだことのない国に息子たちを「帰国」させたのである。そこに戦後の歴史の複雑な変遷があった。ヨソヒはアボジからそれを聞きだそうとしていた。なぜ、故郷でもない北朝鮮へ三人をやったのか、と。

それをわたしなりに簡単に整理すると——一九五〇年代はじめ、南北に分断された北朝鮮と大韓民国(以下韓国)は、朝鮮戦争によって同じ民族同士の敵対関係がつけられた。北朝鮮はソ連の援助をうけて急速に復興しつつあったが、韓国は軍事独裁政権で、政治的経済的に不安定で困窮した状況にあった。そのなかで北朝鮮の金日成は「在日」にも援助の手をさしのべ、人々には北朝鮮の社会主義体制が「希望」の地として映った。世界的にも、人間の平等をうたう社会主義諸国がつつぎと誕生していた時代である。やがて北朝鮮は、ソ連と

中国とが対立しはじめたこともあって自力更生をはかり、独自の国づくりの必要にせまられた。そこで「主体思想」を編み出し、急速な経済発展をめざす「千里馬」運動が展開され、新たな労働力も必要になってきた(日本との国交も求めていた)。日本ではそれとは逆に、「在日」にたいする差別と偏見で、在日の失業者が多く、そのために福祉事業資金が逼迫し、政府はこれの削減をはかるうとしていた。この両者の思惑が一致し、北朝鮮への「帰国事業」が可能となった。当時、総聯幹部となったばかりのアボジも、日本で差別され貧困をかこつて生きるよりも、北朝鮮を「祖国」として新しい国づくりを進進する方が、在日の人々にとって未来があると思ひ定めたのだらう。そのためにかはオモニとともに活動に励んできた。(注1)

しかし、その後、ソ連が崩壊して支柱を失った社会主義諸国もつつぎに解体していった。北朝鮮も九〇年代に入ると洪水などの自然災害(山林伐採による農業政策の失敗)や工業の停滞と金日成の死などが重

なって経済が疲弊し政治的にも行きづまった。その後、封建的な世襲制によって引きついだ金正日キムジョンイルが「先軍政治」を推し進め、人民を統制し、アメリカ帝国主義とその配下の韓国による戦争政策にその場しのぎの力の誇示政策で対抗してきた。この結果、ヤンの家族はますます日本と北朝鮮とに引きさかれることとなった。兄たちと年の離れたヨンヒは、こういった歴史の移り変わりをみてきて、いまだにかつての「希望」にしがみついたアボジやオモニに違和感を覚え、アボジといさかいをするようになった、とナレーションで語っている。彼女はビートルズや現代演劇が好きな娘だった。そんなヨンヒが変わったのはビデオカメラで家族を撮ることになったからである。この変化がおもしろい。それは彼女が北朝鮮の兄たちを訪ね、兄の子どもを撮影し、それを両親にみせて喜ばせ、また両親を撮って兄たちの所へ持っていくといった往復運動のなかでアボジを中心に国と国とに引きさかれた家族の映画をつくらうと考えようになっただからだ。

初めアボジは「アホか」と抵抗していたが、娘ということで気を許し、小道具のカメラを介することで、いつしか娘とのコミュニケーションがとれることを喜ぶようになった。彼女もカメラの介在で、これまで感情的に拒絶してきたアボジに関する事柄を積極的に引きだそうとするようになった。それがアボジとの距離を縮めることとなった。この両者の関係が画面から生き生きと伝わってくる。たとえば、アボジは四十になる娘に早く結婚しろという。「どんなんでもええから」と。娘は「どんなんでいいの？」と念を押す。すると「アメリカ人と日本人はダメだ」という。娘は「いっぱい注文があるんじゃないか」と文句をいう。こんな会話が日本語と朝鮮語のチャンポンでつづく。これには誰しも噴き出してしまふ。そして、そこにもアボジの「思想」がとらえられていて、第三者には建前しかいわないアボジもつい本音をもらしたりする。これは日常の些細なことでも撮れる小型カメラならではの効用といえよう。その上にヨンヒが一度も登場しないこと

も興味ぶかい。彼女はもっぱら撮るひとで、彼女の昔の写真とか撮影しながらチラリと映る手足や声でしかない。それでいて映画の一方の主人公になっている。撮るひとと撮りつつ主人公になることで、被写体（アボジ）の内面により深くせまることができる。こうした表現方法によって、撮影がむずかしい北朝鮮のふつうの人々の日常も切りとってみせる。たとえば、北朝鮮でのシーンは、万景峰号マンギョクソクゴウで元山港に到着するところ、ピョンヤンの住宅街や記念堂を散策するところ、兄たちのアパートでの生活と孫たちが「いつも仕送りありがとう」と感謝するところ、また父の古稀を祝うのに父が費用を出したパーティーなど。なかで印象深いシーンもあつた。それは長男の子どもが、夜、電力不足の停電のなかローソクの明かりをたよりにピアノを弾くところ。長男は大阪時代クラシックが好きだった。音楽家になりたかったのか、かなわぬ「希望」を子どもに託したのか。子どもは音楽のエリート校に通っていて、かれの弾くピアノ曲はなかなかの

ものだった。それを長男も満足そうに聴いていた。しかし、これらを見ていても、北の質素で苦しい生活が、かいまみえてくる。(注2) わたしはこの映画によって、万景峰号が、「帰国者」の生活物資を日本から送る、その命綱になっていることに改めて気づかされた。それなのに日本政府は、あるうことか一方的に寄港停止させたが、それは金正日に対するよりも、「帰国者」をまっ先に飢えさせることを意味する。映画をみたものには、これがいかに愚かしいかがよくわかる。わたしはやりきれない気持ちになった(ちなみに日本政府は、北朝鮮の失政や挑発——拉致やミサイル問題などを逆手にとって、北朝鮮と日本の民衆を共に抑圧する手段として利用している。国家主義体制としての整備を推進する日本政府には、都合のいい「国家」なのだ。それなのに民衆の多くは、自分の首も一緒に絞められているのにやんやの喝采を送っている)。

州島から大阪の「在日」の街にやってきて、根なし草のように生きてきた。「祖国」のない故郷喪失者であった。それが北朝鮮への「帰国事業」運動と結びついて、運動がこれのアイデンティティとなった。もつとも、この時代、帰国運動を展開したのはひとり総聯だけではなかった。日本政府も革新政党もそれぞれの思いからこれを推進した。その意味では、アボジの「希望」はその時代の大きな潮流でもあった。しかし、アボジのそれは単なる「思想」ではなく、三人の息子を「帰国」させる実践によって示したことだ。その実践は、その場の「思想」と違って、時代が変わろうとも生涯ついてまわる。そこで娘が「三人全部行かして、後悔してる？」と問いかけると、アボジはためらいながら「甘かった」と吐露する。これは絶対に息子たちに聞かせてはならない言葉である。翌朝になると、今度は「最後まで金正日将軍に忠誠をつくす」と息巻く。それによって自らを奮いたたせずにはいられない。そこから、ある時代の「希望」を一身に背負って、歴史と現実を引きさか

れた者の苦悩が浮かび上がってくる。どんなに時代が変わっても自らの生き方を変えてはならないとする決意表明もうかがえる。ディア・ピョンヤン！ 笑わば笑え、それ一つ一つの生き方なのだ——そういう人間の生き方と歴史の齟齬を深い愛情をもって内側から掘り起こしたところに、この映画のすごさもある。

注1 在日朝鮮人は、戦時下、日本軍によって「徴用」という形で強制連行された人々も含めて敗戦時には二、三六万人いた。敗戦直後、GHQが無償で朝鮮人の「帰国事業」を実施した。この時帰国した人々は一四〇万人、残留した人々は五三万人で、その余は不分明。現在五五万人とされる。「帰国事業」という言葉はこの時からのものと思われる。

注2 実は、これらのシーンでも、本当のところは撮りきれしていない。三人の息子が北朝鮮で何を考え、どう生きてきたかが見えてこないからだ。ナレーションでもヨンヒは「兄たちは笑ってばかりいた」と語っている。そこからかれらが沈黙をしいられる「監視社会」も浮かび上がってくる。